豊橋市美術博物館友の会だより

−2011年−春号 Vol.79

FU風伯HAKU

Spring 2011

私を感動させた一枚の絵

「一枚の絵をそれぞれの人は、こんなにも深く感じるものなのか。自分ならどう感じるのか、一度この絵の前に立ってみたい」と、「中村正義《うしろの人》を観て」の特集に感想が寄せられました。「人はなぜ美を求め、美を感じるのか」をテーマにしての第3弾は「私を感動させた一枚の絵」。様々な人生を歩いてきた人たちは、どの作品の何に感動したのでしょうか。

私が救された一周りの絵

県立岡崎高校コーラス部・三河市民合唱クラブ・
豊川コールアカデミー・岡崎混声合唱団
指揮者　近藤惠子

クロード・モネ（1840-1926）
《睡蓮》1920-26年
オランジュリー美術館蔵

今から約20年前の冬、主人の母とヨーロッパ旅行に出かけた。嫁いで20年、学校勤務に加え、複数の合唱団を指揮しながらソロリサイタルやオペラ出演等、激しく活動する我儘な嫁に、母は文句も言わずにゆったりとした笑顔で娘二人も育て上げてくれた。感謝してもし切れない母にささやかなプレゼントのつもりで、ロンドン、パリ、ローマを巡るツアーに参加した。

かなりの欲張り旅行で、パリに着く頃には二人共ヘトヘト状態。ツアーとは離れてパリ二日目を教え子のYの案内でゆったり過すことにした。パリの隠れた美しい所やおいしいお店を満喫して、最後にモネの《睡蓮》で有名なオランジュリー美術館に辿り着いた。そこで今思うと空白？の何時間かを過す不思議体験をした。

印象派の色々な作家の作品を見てから地下に降りた。最初の部屋に足を踏み入れた途端、思わずウォーと低くうめき、両手を広げ、丸くて広い部屋を何回も旋回した。周りの壁は全て睡蓮！そんな部屋がもう一つ有り、様々に変容する睡蓮が光を変え風を変え自分の周りをとり囲んだ。何とも言えない開放感と安堵感とで中央に置かれたソファーに座り込んだ。

音楽でも美術でも、私にとって感動というのは、ハッとしたりガンときたりゾッとしたりして汗や涙が出て、震え戦くものであった。ところがここでは緊張どころか体中が緩んでいくのがわかり、まるで自分が全て赦されたような優しく柔らかな風が吹き、その風に身を委ねて時を忘れた。

どのくらい浮遊し続けたのだろうか……母は完全に眠っていたようだ。Yはきっとしびれを切らしていただろう。

やがて係の方に閉館を告げられ外に出た。とっぷり暮れた冬のパリは寒く、やっと我に返った。疲れは消え、優しい風に乗った高揚感でぐんぐん歩けた。

Yには夕食を奮発した。

美とは、人生に勇気を与える一瞬の光

財団法人豊橋文化振興財団
芸術文化プロデューサー　中島晴美

クロード・モネ（1840-1926）
《睡蓮》1916年以降
ナショナル・ギャラリー蔵

1枚を挙げるのは困りましたね……私の絵との出会いは、描くことから始まりました。鮮明な記憶とし

てあるのは、幼稚園で居残りをして描いたこと。それまではクレヨンだったのが、初めて絵具で、それも筆ではなく手で大きな紙に描いた。それが運動会の入場門に飾られたこともあったのでしょう。その後、母の勧めで絵画教室に通うようになりました。

本物の作品鑑賞は、高校1年生の時に母につれられて博多で見た「ルノアール展」。オレンジ色の鮮やかな色は今も目に焼き付いています。そんな記憶をたどると、どうも私は「色」に引きつけられるようです。

「感動した絵」としては、クロード・モネの《睡蓮》を挙げましょう。1980年、初めて訪れたロンドンでウエストエンドの劇場通いをしていたころのこと。当時、町中はパブばかりで喫茶店らしきものがなく、毎日、ほっと一息つきたくなると足を運んだのが、トラファルガー広場にあるナショナル・ギャラリーでした。博物館や美術館は無料だったのです。

作品を傷めないよう薄暗い部屋に展示されたレオナルド・ダビンチの素描、印象派の名画、教科書で見た作品……。どれも、ガラスで保護されておらず、作家の息遣いが伝わってくる感動がありました。

なかでも惹きつけられたのが、ギャラリーの入り口近くの、1920年代に描かれた作品だけを集めた小さな展示室です。そこに《睡蓮》(200×427)がありました。中央に一つ置かれた木製ベンチに座って壁一面の《睡蓮》を観るのが日課のようになっていました。

モネの目が不自由になっていた頃の絵です。「日本庭園」の鮮やかな色彩はなく、ぼーっと燃える炎のような《睡蓮》は、まさに作家の魂・命そのもののように思われました。

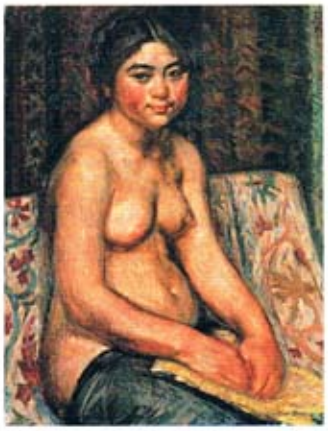
私にとっては特別な場所、そして特別な絵。当時はそこで、あるときはひとりで次に観る芝居の台本を読み、あるときはひとと待ち合わせたりしました。その後も2000年までの20年間、毎年夏と冬の一時期をここで過ごしています。私の人生で、抜き去ることのできない時間がこの絵とともに存在しています。

「美」とは永遠の時間の中の限りある時間を生きる凡人に勇気を与えてくれる「一瞬の光」、とどめ置くことが不可能で、はかなく、そして強さと潔さを持ち合わせたとても清潔なものだと思います。

100年の時をこえ、元気をくれる一枚の絵

豊橋創造大学短期大学部教授　藤本逸子

中村彝(つね)(1887-1924)
《少女裸像》1914年(大正3)
愛知県美術館蔵



私が、彼女と初めて会ったのは、1992年に開設した愛知芸術文化センター内の愛知県美術館常設展であった。開設早々のころと記憶しているので、20年ちかく前ということになる。目当ての作品があったわけではなく、展示品を何気なく見ながら歩いていた私は、《少女裸像》の前で釘付けになった。

何と健康的！　赤い頬！　ふくよかな肩！　豊かな腹！　骨太の手首！　何の迷いもなく真っ直ぐ見つめる目！

私の心の中は、「！」でいっぱいになった。同時に、「元気」が沸々と湧いてくるのを感じた。そして、たちまちモデルの「相馬俊子」のファンになった。今も、疲れが溜まってくると、愛知県美術館に出かけて俊子に会い、「元気」をもらっている。

明治生まれの俊子である。衣服を脱いでのモデルは、なかなかできるものではなかったであろう。これほど清々しい表情で画家を見つめることのできる娘に育てた彼女の父相馬愛蔵と母黒光に思いを馳せる。多くの文化人が集うサロンを開き、芸術家を支援し、イ

ンド独立運動の志士を匿った相馬夫妻にして、この子有り。流石である。

健康そのものに見える俊子は、しかし、28歳で亡くなっている。

「俊子さん、モデルになってくれてありがとう」

「彝さん、俊子を描いてくれてありがとう」

おかげで、ほぼ100年後の今も、10代の溌剌とした俊子に会うことができる。

「《少女裸像》さん、いつも『元気』をくれてありがとう」

短くも濃密な時間への羨望、あるいは畏怖

豊橋北ロータリークラブ事務局　児玉由紀

カミーユ・クローデル(1864-1943)
《分別盛り》1898年
ロダン美術館蔵

20代のある年、それは楽しい夏休みをフランスで過ごしていた。パリでは、美術館をはしごした。その中の一つにロダン美術館がある。彫刻に、特に興味があった訳ではない。しかし、此処で初めて彫刻を見て、胸が震えた。それは、ロダンの弟子で愛人でもあったカミーユ・クローデルの《分別盛り》だった。

ロダン美術館にあるカミーユの作品の展示室は、喧しい。勿論、本当にうるさいのではなく、その作品を眺めていると、人間の声や音楽が聞こえてくるような気がするのだ。作者の持つ激しい感情とそれを表現できる才能を思わせる。カミーユとロダンの関係は、以前映画で見ており、その時は、彼女のような執念を私は到底持てない、持ちたくないと感じていた。それなのに、カミーユの作品を目の前にしたら、足が動かなかった。

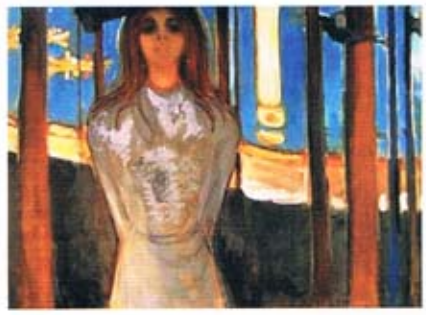
好き嫌いで言えば、《分別盛り》よりも愛に包まれた幸福な瞬間を感じさせる《ワルツ》の方がよっぽど私の好みである。私は当時も今も、追うよりは追われる方が幸せだと思っている。しかし、あの時醜い老婆に連れ去られようとする男性に、追いすがる美しく若い女性に感じたのは、憐憫ではない。私には想像の及ばない激しく深い感情がもたらす短くても密度の濃い時間を生きる彼女への羨望とも畏怖ともつかない気持ちだ。彼女のその後の人生を思えば、一概にそれが幸せな事とは言えないが。

あれから十数年が経ち、私も十数年分の経験を積んだ。どんな声が聞こえてくるのか、あの時は聞こえなかった老婆の声かもしれないが、もう一度この作品の前に立ってみたい。

美術鑑賞は、新たな自分を発見する旅

アートコーディネーター　松井香奈枝

エドヴァルド・ムンク(1863-1944)
《声》1893年
オスロ国立美術館蔵



名画の並ぶ展覧会の最後に現れたその絵は、強烈に私をとらえた。

私が感動した一枚の絵は、数年前に名古屋のボストン美術館でみた、エドヴァルド・ムンクの作品である。タイトルは《声》。ムンクは多作であったが、やはり代表作の《叫び》以外の作品を私は知らなかった。この《声》は、海辺にたたずむ一人の若い女を描いた作品である。不安定な色彩、表情の分からない女の人の顔が、静かに、でもなぜだか心に張り付いた。印象としては、決して激しいところのない、どちらかといえば地味な色味の作品である。これは、ムンクが

初めての恋に落ちたときの作品であるとされているが、その気持ちの不安定さや、期待、恐れなどが画面から溢れてきて包まれるような感覚になった。一枚の絵のパワーがこれほどまでかと、しばし、衝撃と共にうっとりと眺めてしまった。

美とは、時として自分の心を映す鏡のような物であると考える。健康的なものや平和的なものに美を感じるときもあれば、不安定なものや、退廃的なものにそれを感じることもある。同じものを見ても、美しいと感じるときと、そうでないときがあるだろう。

だから、私にとっての美術鑑賞は、新たな自分を発見したり、ちがった角度から自分を映してみたりする、一つの旅だ。印象に残った作品について反芻するのも、すごく貴重で楽しい時間である。これからも数々の美に出会う旅を続けていきたいと思う。

青でも蒼でもない、碧の清涼感に惹かれて

国際ソロプチミスト豊橋 会長　竹内文子

ジョヴァンニ・セガンティーニ(1858-1899)
《アルプスの真昼》1892年
大原美術館蔵

倉敷の大原美術館でその絵にあったのは、昭和35年、大学1年の終わりに寮仲間と旅をした時であった。ジョヴァンニ・セガンティーニの《アルプスの真昼》である。50年前といえば、日本はまだ復興のさなかで、美術を楽しむどころではなかった。大原美術館もギリシャ神殿風のファザードのある建物のみであった。薄暗い照明のなかにひときわ明るい碧、今まで見たこともない透明な碧であった。青でもない、蒼でもない、私には、まさに碧であった。とにかくこの画家の名前だけは記憶しておこうと思った。後々になって、彼はイタリア人であるが、スイスを好み、この地で多くの作品を描いたことを知った。ニューヨークのメトロポリタンで、彼の絵に逢ったときのことも忘れられない。印象派とは異なる清涼感に惹かれるのである。

セガンティーニとは対照的ではあるが(といっても象徴主義というカテゴリーは同じである)、なんとしても見たい絵がある。アルノルド・ベックリンの《死の島》。5点あるなかの最後の作品1886年作、ライプツィヒ美術館にあるはずだ。光溢れる絵に憧れてより50年も経てば、このようになるのであろうか。行かねばならない。

内なる感情を呼び起こす絵画

豊橋商工会議所会頭(豊橋信用金庫理事長)
吉川一弘

ベルナール・ビュフェ(1928-1999)
《アナベル夫人》1959年
ベルナール・ビュフェ美術館蔵

最近において私の印象に強く残った絵は、ベルナール・ビュフェの作品です。特にこの一点というものはありませんが、この画家の画風に強く興味を覚えました。

でも、敢えて作品名を挙げるならば、《アナベル夫人》、《私のサーカス》でしょうか。これらの絵を見たのは、一昨年の7月に職場の仲間とベルナール・ビュフェ美術館(静岡県長泉町)を訪れた時でした。

初めは単に旅行の訪問先の一つとしか考えておりませんでしたが、実際に美術館に足を踏み入れてみると、ビュフェの作品数の多さに驚かされると共に、その独特な画風に圧倒されました。黒色の輪郭線と明るい色彩が特徴の画風は、一度見ただけで私の脳裏にこび

り付き、忘れることの出来ない強い印象を残しました。これまでにも色々な美術館を訪れる機会がありましたが、この時、日常を離れた旅先で改めてビュフェ作品と対峙したことは、絵画が自分の中の仕事以外の関心や感情を呼び起こしてくれた貴重な体験であったと考えています。これからも多くの作品を鑑賞する時間を設け、心に落ち着きや安らぎを感じさせてくれる作品に出会いたいと思います。

話は変わりますが、当金庫では、地域貢献の見地から地元出身の画家作品を何点か所蔵しており、本部本店を始め各営業店の応接室等にローテーションを組んで展示しております。これからもこの主旨に基づいて地元画家の作品を中心に所蔵していく予定ですが、機会があれば皆様にも見て頂きたいと考えております。多くの方に、作品から感動をじかに受けて頂けたら、これほど嬉しいことはありません。

美とは言葉や文化をこえて感動を共有するもの

豊橋市美術博物館館長　後藤清司

ドミニク・アングル(1780-1867)
《泉》1856年
オルセー美術館蔵

感動した一枚の絵となると、日本画・洋画・版画などジャンルや国・時代を問わず、あれもこれもと浮かんできます。20年ほど前に、開館10周年記念展覧会の業務でヨーロッパを訪れた際の紀行文を『風伯』へ掲載させていただいたことがありますが、その中で紹介したのがオルセー美術館所蔵のアングル作《泉》でした。

あまりにも有名な作品で月並みだと思われるかもしれず、再び紹介することを少しためらいましたが、やはりこの作品に決めてペンを執りました。

小中学校の美術の教科書には、必ずといっていいほど紹介されていると思いますが、《泉》は18世紀フランスの新古典主義の画家ドミニク・アングルによって描かれました。この作品は、アングルがフィレンツェ滞在中の1820年頃から描き始めたもので、理想化された女性をイメージしたとされているものであります。

私が当時、オルセー美術館で《泉》を見たときの印象は、"初恋の人に再会したような気持ち"で、胸がドキドキしたことを覚えています。それは、私自身も理想の女性の持つ美しさを《泉》に感じていたからだと思います。

こうしたアートの持つ"美"は、言葉や文化の違いなどの垣根を越えて、多くの人と感動を共有できる素晴らしいものだと思います。これからも、感性を磨き上げ、自分の人生を豊かにしてくれる展覧会や美術館に、時間の許す限り、国内外を問わず足を運びたいと思っています。

画面から溢れ出る生命力とエネルギー

美術博物館友の会副会長　神野能生子

横山 操(1920-1973)
《塔》1957年(昭和32)
東京国立近代美術館蔵

ずっと若いころ見た展覧会で、決して忘れられない情景を思い出す。東京のデパートであった横山操と加山又造の二人展。加山の絵は何も思い出せないのに、荒々しく躍動感溢れる横山のものすごい大作群にすっかり心を奪われてしまったのだ。これは1966年(昭和41)日本橋高島屋だったのだが、同行者など他のことは何も思い出せない。当時社会の風潮は強い右肩上がりで、若かった私も横山の生命力とエネルギーにすっかり魅せられてしまったようである。

《塔》は高さ3メートル余の縦長の大画面から、はみ出す勢いで立っていた。黒焦げの骨組みだけの五重の塔、

しかし心柱はしっかり揺るぎなく、一重目の太い一文字の朱色があざやかである。何も余分のもののない画面は、まるで偉大な高僧の墨跡のようで強い精神的なインパクトがあった。谷中の五重の塔が焼けたことは大きなニュースだったが、横山はまだ燃っているうちに駆けつけてこの絵を描いたそうである。

横山は中村正義より4年早く生まれ4年早く53歳で亡くなった。《越路十景》や《富士八景》など、静謐な素晴らしい絵も多い。特に絶筆は小品で未完だが、林の中の小道はあの世まで続いているようだ。私はこの木々の姿が特に好きである。

最後に、加山又造さんはずっと長生きして琳派風の独自の境地を開かれた。美はきれいとは限らない。好きなものは人それぞれ違う。たくさんいろいろなものを見て感じて心惹かれるものを見つけることが、人生を豊かにする。

見る者の年輪とともに重みを増す作品

豊橋技術科学大学学長　榊　佳之

ポール・ゴーギャン(1848-1903)
《われわれはどこから来たのか、われわれは何者か、われわれはどこへ行くのか》1897-1898年
ボストン美術館蔵

パリのオランジュリー美術館でモネの睡蓮に囲まれる時、ウィーンの美術史美術館の一室で名画の中に静かに座っている時……美術館は何処も日常を離れ美の世界に浸り、心休まる至福の時と空間を与えてくれる。音楽ではその「至福」を越えて更に私の奥にある琴線が揺り動かされ、言葉では表現しがたい熱いものが体の中から湧きあがってくるのを感ずることがある。美術では私の感性はまだそこまで成熟していないものの私の頭を離れない絵がある。ゴーギャンの大作《われわれはどこから来たのか、われわれは何者か、われわれはどこへ行くのか》である。

私はヒトの遺伝子・ゲノムを通して「人間」を問う研究をしてきたが、美の世界とは凡そ異なる生命科学の観点からこの哲学的な作品に興味を持ち、20年ほど前にボストン美術館を訪れた。右端に赤ん坊、中央には生の喜びを示す若い女性、そして左端には人生を終えようとする老女、これらを軸に人間を取り巻く生き物や自然、それらを超越する「神」が力強いタッチで描かれている。複雑な文明社会ではなくタヒチの自然の中で生きる人々を描くことで、「人間とは何か」を問う作者の思いが力強く、率直に伝わってくる。まさに渾身の力作である。音楽でいえばベートーヴェンの交響曲5番「運命」であろうか。一昨年、名古屋ボストン美術館で再びこの作品と対面する機会に恵まれたが、同じ作品でありながら以前よりずっと深く感ずるものがあった。見る者の年輪とともに重みを増す、私にとって忘れられない作品である。

原始世界を追求し、人間の本質を描く

美術家　坂柳光香

ポール・ゴーギャン(1848-1903)
《われわれはどこから来たのか、われわれは何者か、われわれはどこへ行くのか》1897-1898年
ボストン美術館蔵

ゴーギャンの作品と言えば、タヒチを舞台とした鮮やかな色彩の、単純化・平面化された絵画表現が印象的である。私が感銘を受けた絵は、自殺を決意した

ゴーギャンが最後の目論見として、「人類とは何か」をテーマに描いた集大成とも言える作品だ。

西洋文明との決別を図ろうとしたゴーギャンは、原始的なものに神秘性を見出すことで自己の方向性を確立させていった。この作品に描かれた人間の姿には人の一生が表現されており、生と死や人間の存在を普遍的なものとして描くことで、人間の本質を示そうとしている。

私はこの作品の神秘的かつ原始的な雰囲気に興味を惹かれた。私は人間と植物を描くことが多いのだが、そのイメージはこの作品に感化された所が大きい。ゴーギャンの作品は人間と自然が同じタッチで描かれており、そこには両者に対する統一された価値観が感じられる。

横長のキャンバスに描かれたこの作品は、世界がパノラマに広がっており、自然な目線で絵と対峙できる。そのパノラマ感が気に入り、私も学生時代に同様のキャンバスを使って、広大な大地に人が立っている絵を制作したことがある。大自然の一部である人間を表現しようと試みたのだ。

またゴーギャンのこの作品は、今までの西洋絵画には無い独特の湿度を持った土臭さがあり、何とも言えない魅力を放っている。絵具が土や鉱物から作られていることを思い起こさせ、タヒチの沃土をそのままキャンバスへ塗っているかのような画肌を持っている。にじみ出て来る土臭さは、原始的な世界へ執着したゴーギャンの思考の現れなのかもしれない。しかし、そういった自分の価値観を作品に投影させることは簡単なことではない。タヒチという地で、ゴーギャンの求める芸術を貫いたからこそ、このような神秘的な絵画が生まれたのだろう。この絵にはそうした画家の姿勢が凝縮されており、何度見ても飽きることはない。

感動に胸を熱くした瞬間は人生の宝物。11人がそれぞれに味わった感動とその思いを共有していただけたでしょうか。同じ作品を観て、何故に受け止め方が違うのか不思議でもあります。私達はなぜ美を求め、感動を求めるのでしょうか。美と、どう向き合えばいいのでしょうか。あなたが感動した一枚の絵はどこにありますか。感動したあなたは何者ですか、どこへ行くのですか。

最終回にあなたは何を期待しますか、何を希望しますか。『風伯』編集部にあなたの心の声を聞かせて下さい。

（風伯編集部）

編集後記

「なぜ人は美を求めるのか、美とは何か」と風伯編集会議は毎回議論沸騰。これは大変楽しいことでしたが、この79号にはその盛り上がりを感じて頂けるのではないでしょうか。各方面の方にお願いいたしましたところ、快く素敵な文章をお寄せくださいました。

この11点のエッセイを読みますと、人にとってアートとは何かがぼんやり浮かび上がってくるような気がいたします。時には人生の癒しであったり元気の源であったり、道しるべであったり、これだけ心に残るものに出会えると一生の宝物となることでしょう。

豊橋市美術博物館ではなかなかモネの睡蓮を展示するわけにはいきませんので、豊橋独自の特色ある催しを計画し、友の会はこれに協力しております。皆さま身近で小さな宝物探しをなさいませんか。どんな催しを希望していらっしゃるのか、どんなものをご覧になりたいのか、どうぞお便りをお寄せください。この特集のような、ご自分の忘れられないアートでも結構でございます。

（神野能生子）

【表紙作品】
岡田三郎助　1869年（明治2）－1939年（昭和14）
《麻の着物》（部分）　1929年（昭和4）　麻布・油彩　53.0cm×33.5cm

豊橋市美術博物館 友の会だより「風伯」第79号
編集・発行　豊橋市美術博物館友の会
会長　宮田正人
担当副会長　神野能生子
編集長　鈴木伊能勢
編集委員　福島陽子　金田順子
協力　豊橋市美術博物館
〒440-0801 豊橋市今橋町3-1　TEL.0532-51-2882
平成23年3月20日発行